



## 年間第 29 主日 (ルカ 18:1-8)

家族

「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。」(18・1) 私たちも、イエスから、「気を落とさずに絶えず祈る心」を学び、持ち帰ることにしましょう。

19日(土)、宝亀小教区中野教会の大神学生が教会奉仕者に選任されました。教会に与えられる恵みは、いつも私たちの祈りに神様が答えてくれるしるしだと思います。教会奉仕者に選任される神学生の努力ももちろん必要ですが、最終的には神の民の祈りに、神様が答えてくださって、恵みは与えられるのです。

中田神父には選任を受けた大神学生について語るだけの情報を持っていませんが、この日までに私が体験したことの無い苦労を体験したと聞いております。たとえばそれは、休学した期間があったということです。休学すると、2年とか、3年とか、場合によってはそれ以上の時間を回り道することになります。

この間に本人が祈りを忘れたら、復学することはまず不可能です。休学したことで祈りの大切さを、休学したことの無い私以上に学んでこの日を迎えたに違いありません。休学中に、「気を落とさずに絶えず祈る心」を鍛えたのです。

しばしば私たちは、体験をすることで、物事の良さを理解できるようになります。11月、日本に再び教皇様がおいでくださいます。「気を落とさずに絶えず祈ること」これがいかに大切か、教皇様のために祈ってみて皆さんも良く理解できるようになっているでしょう。絶えず祈り続け、祈りを積み重ねたことで、私たちに教皇様来日という神様の恵みが与えられようとしています。

ひょっとしたら政治家も、バチカンの元首を招こうとずっと動いていたかも知れませんが、ただ政治家の行動だけでは、今回の教皇来日は実現しなかったのです。私たちが訪問して、日本の教会を守ってくださる。来日のテーマは「すべてのいのちを守るため」です。そこに日本の教会といういのちを守ることも、教皇様にとっての大切な来日の動機だと考えています。

さて今週福音朗読に選ばれた「やもめと裁判官のたとえ」は、一人のやもめの切なる願いに「神を畏れず人を人とも思わない裁判官」が応えるという物語でした。「相手を裁いて、わたしを守ってください」とやもめは言っています。名誉の挽回もあるかも知れませんが、私は、「いのちの危険」が彼女には迫っていたのではないかと思うのです。

当時の男性優位の社会では、社会的に弱い立場にある未亡人の女性は、不利な扱い、不当な扱いを受けても泣き寝入りすることがしばしばだったでしょう。しかし物語の彼女は泣き寝入りで終わらず、裁判官に保護を願いました。泣き寝入りで済む問題ではなかった、そう考えてみ

ました。いのちの危険すら感じていたので、裁判官にすぎたのだと考えたのです。

いのちの危険を感じ、いのちを守ろうとする人は、どんなに困難な道でもやり抜きます。登場したやもめは、いのちを粗末に扱われ、いのちを守ってもらおうとしたのかも知れません。不正な裁判官の言い分によると、「うるさい」と思うほど、「ひっきりなしにやって来た」のでした。やもめにはどうしても守りたいものがあって、これほど裁判官に食い下がった。不思議ではありません。

私たちもきっとそうでしょう。いのちに関わることを守ろうとするなら、それが何年かかろうとも、守り抜くたたかいを続けるでしょう。守るものが裁判官に申し出る内容でなくても構いません。

もしその人が、いのちを大切にしてくれる人に出会えず、さまよってきたとしましょう。その人は祈るでしょう。「私のいのちを大切に守ってくれる人に出会わせてください」と。それが10年でも20年でもです。ひよっとするとその人は、25年祈り続けて、自分の祈りに神様が応えてくれて、いのちを大切にしてくれる人と出会うかも知れません。

38年前、日本に初めて教皇様がおいでになりました。260年間一人の宣教師もなく、260年後にプチジャン神父様が与えられた時と同じくらいの喜びで、私たちは教皇ヨハネ・パウロ二世をお迎えしました。再び日本の教会は、いのちの危険にさしかかっているのではないのでしょうか。38年前、神学生も溢れるほど与えられていましたが、現在長崎の神学院には学年ごとに2人とか、3人といった状況です。大神学院にしても状況は変わりません。これは、司祭を確保する瀕死の状態、いのちの危険にさしかかっている状況かも知れません。

洗礼を受ける人も、少なくなってきました。カトリック信者同士の結婚も、めったに受け付けることがなくなりました。これらの目に見える状況が、日本の教会がひよっとしたらいのちの危険にさしかかっていることを物語っているのではないのでしょうか。そこへフランシスコ教皇様が、「すべてのいのちを守るため」においでになったのです。

もちろん、教皇様の来日テーマは、人間のいのち、自然界のいのちのことでしょう。けれども私たちが教皇様来日に向けて心一つにして祈る中で、昼も夜も祈る中で、神様は私たち日本の教会のいのちを守るためにも教皇様を送ってくださるのではないのでしょうか。

「まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。」

(18・7)「気を落とさずに絶えず祈る」この心が、聖霊を通して教皇様を動かしてくださったのだと考えました。

私たちの頭の中には、日本の教会の再生へのはっきりした道筋はないかも知れません。しかし「気を落とさずに絶えず祈る心」を失わないならば、教皇様の来日に刺激を受けて、何か突破口が示されると信じています。そのためには文字通り、日本の教会のために「気を落とさずに絶えず祈ること」が私たちに求められています。